

堤中納言物語「はなだの女御」題名考

土岐 武治

(一)

「はなだの女御」の題名の校異について、現存諸本の本文を調査すれば、「はなだの」までの本文には異同はない。但し、彰考館蔵本の目次の個所のみは、「はな／＼の」と見えるが、この本文中の当該篇の内題では、諸本と全く同一で、「はなだの」となつてゐる。これは按ずるに、目次の「はな／＼の」疊語「／＼」は、「はなだの」の「た(多)」の草体の紛れに近似することによる、無意識的な転化現象から派生する誤写の結果と推測される。「はなだの女御」の「女御」については、諸本に異同がなく、たゞ堤中納言物語の伝本系譜上、第二門第三類第一種に属する無窮会図書館蔵清水浜臣自筆本・同図書館蔵清水浜臣本・上野図書館蔵榊原本(一冊)・宮内庁書陵部蔵本(一冊)・長野県立図書館蔵岩上貞融本や、第二門第三類第四種の河嶋又生氏蔵小山多乎理本・多和文庫蔵本・旧群馬師範学校本などの諸本に限つて、上記の個所は「女郎」と伝へるのである。右の「はなだの女郎」と見える諸本の祖本は、清水浜臣自筆本であるが、この自筆本を写す岩下貞融(一八〇一—一八六七)自筆本の「はなだの女郎」篇の書込中に、次のことばがある。

○清水氏曰「縹女郎不審、もし花々女郎の誤歟さま／＼の草花にたとへたることあればなり」といへり。はな／＼の女郎とありけんをはなだと見あやまりてつひに縹女郎とかけることうつなし。

○融云、こゝにはなだの女郎とあるかたよろしくて目録に縹女御とあるかたかへりてわろくおぼゆ。

○はなはなの女郎といふ名は、花々の女郎にてさま／＼の草花にたとへたることあれば也。目ろくに縹女御とみえ後に縹女郎とあらはな／＼をはなだとみあやまりて、つひに縹とかはるならんと、今の泊汗舎と聞ゆる清水氏のいはれたるが如し。

上掲の例文通り、清水浜臣は諸本に伝へる「はなだの女御」の題名を「はな／＼の女郎」の誤謬と推定したのである。この場合の「女郎」とは、婦女子と云ふ意であらう。例へば、女郎について、無題隨筆(伊勢貞丈著 写本 内閣文庫蔵)には、次の如く説明してゐる。

女郎 本朝俚諺ニ白樂天詩ニ本蘭曾作女郎ニ搜神記ニモ女郎アリ、杜牧詩ニ女郎撥乱送秋子ニ音端北夢瑣言言一日見一女郎

個処の本文異同を検討しても、殆ど原文通りであつて、従つて浜臣本の本文中の内題に伝へる「はなだの女郎」同本目次の当該題の名は「縹女御」「郎」は、おそらく「女御」の「御」の無意識な転化現象による誤謬であらうと臆断されるのである。

また、堤中納言物語評解では、「はなだの女御」といふ題名について、左のやうな異説が述べられてゐる。

「女子」即ち「女ご」が「女御」となつた例や、そうなり得る例を掲げて置こう。宇都保物語の国譲巻上の、太政大臣秀明が危篤の時に、正頼と実忠を招いて遺言する条に「たゞ思ひ侍る事は、子二人が上をなん思ひ侍る。実頼はまだかう下藤に侍れば……。女御の上は人に聞えおくべきにもあらずとある。「女御の上」は

「女ごの上」の誤である。

「女ご」が「女御」と誤つて伝へる転化の用例は、源子物語の諸本中の一部にも、次の如く見える。

○女ご御(鶴山敬次郎氏本)の人のこ御(東山文庫蔵本)になる事はおさ／＼なし(虫巻)

○とゝめたてまつり給ふ女ご御(首相木)などをもて侍らましに(梅がえ巻)

○しる人も侍らざりけるに女ごをなんうみ侍けるを(宿木巻)

とのやうに、「女ご」が「女御」と誤つて伝来する用例も存するが、「女ご」と本文にあつて、「女御」と読む用例も古写本に少くない。

例へば、深川本狹衣物語中より取り上げて見れば、

○源じの宮、女ごだいし給てやがてまいり給べしとあるとき、給(巻二の下)

○袖ぬらすといふものがたりのそきやうでんの女ごはあはれなる

郎一貞按今世女ノ事ヲ女郎ト云ハ是等ニ因レリ。上藤ノ字ヲ用ルト非ナリ。上藤・中藤・下藤ノ品ハ女ノミニ限ルベカラズ。女ニ上藤・中藤・下藤ト云事アルハ官女ノ位ノ上中下ヲ分ル名ナリ。又今世賈妓ノ克ヲ女郎ト云フモタゞ女ト云フ事ナリ、上藤ト云フ事ニハアラズ。

また、笠沢筆盤(盤鴻君千甫撰)にも

女郎トハ人ノ幼女ヲ称スル也。妓女ヲ女郎ト云ハ義タガヘリ。右ハ婦女ノ通称ナリ。遊仙窟曰、此崔女郎之舍耳、翰墨全集、陳簡夫小姑山廟詩、存、独孤子廟、廻女郎形、唐詩紀、有、大女郎小女郎、全唐詩話、女郎張翥詩話有女郎字

との如く、「女郎」は婦女子の意であつて、清水浜臣も「女郎」の意を婦女子に考へたものと推測する。

次に「はなだの女御」の題名について、李花亭文庫蔵本の該篇の上欄に、藤岡作太郎博士の自筆による書込みが、次の通り伝へてゐる。

はなだの女御ときがたし、催馬菜に「浅緑やこいはなだそめかけたりとやみるまでに玉ひかる下ひかる新京すさかのしたり柳い田舎となるせんざい秋萩なでしこしたりやなぎ」、これによりたりと思へど、やゝ穿鑿にすぎたり。

と見えるが、参考までに特記するのである。

上例の無題隨筆に、伊勢貞丈(一七七一—一七八四)は「貞丈按今世女ノ事ヲ女郎ト云ハ云々」とも説く通り、「女郎」の語は、近世になつて多くの作品に見えるやうになつたものであれば、浜臣説の「女郎」は、「はなだの女御」物語の成立当時平安朝中期、平安朝後期成立の二説ありには、他の文献にも見え難いことばである。殊に題名の「女御」の

心ばえをみつめ給ければにや(卷三の下)

となつてゐる。古典作品中には「女ご」を「女ご」とのみは読んでない上述の考証によつて、仮りに堤中納言物語の伝本中に、当該題名が「はなだの女ご」とあつたとしても、それを直ちに「女ご」と読み、しかもこの「女ご」が、誤つて現存諸本に「女御」と伝来したのであるとの結論には、納得し難いのである。

堤中納言物語十篇中の題名について異同を有する箇所は、

○はなざくらをる少将

〔考異〕 花ざくらおる大將 岩瀬文庫本・矢野家旧蔵本・浅野家旧蔵本。花ザクラ 九条家旧蔵本。はなざくらをる少将 彰考館本・土肥経平旧蔵本・静嘉堂文庫蔵日尾荆山旧蔵本・池田亀鑑博士本・萩原宗固自筆本・滝川君山旧蔵本・横山由清自筆本・教育大学蔵由清本

○はなだの女御

〔考異〕 はなだの女郎(前記参照ノコト)

との如き二篇のそれに過ぎなく、これらの異同を有する異文は、漢字形態の近似によるもの、或は助詞の有る無し位のもので、その題名中の僅少な一部分の相違に過ぎない。もし仮りに「はな／＼の女子」が、堤中納言物語の原型通りの題名と認容してみても、この題名の全文が無意識の転化によつて、「はなだの女御」と誤り伝へたものとは、上述する諸種の例証から判断しても、首肯しがたい推定説と考へられる。その上、現存諸本のいづれにも「はな／＼の女子」と云ふ異文が見えないことを併せ考へると、一層賛成しがたいことになる。

(一)

「はなだの女御」の「縹」とは、別名「露草」とも云ふ。例へば〇縹也、月草の花にてそめし也。故にうつろひ安きなども云へり。(雅言考)

○ハナダ 縹也、波奈太、花田ト書ハ借字也……源氏紅葉賀「中たえばかごとやあふとあやふさにはなだの帯はとりてだにみず」。後拾遺集、和泉式部「なきなかなすみだにたえでたえぬればはなだの帯のこゝちこそすれ」。続後拾遺集「石川やあたに契りやむすびおきしはなだの帯のうつりやすきは」。新葉集「うつりゆく人の契りは月草のはなだの帯は結びたえつ」。

(語籠)

○谷川氏和訓栞に、はなだ草は月草の異名也。うけらが花三、秋、鴨頭草「おく露のいろこそことにさやかなれ秋もときなる月草の花。(難波江)

○万葉呼名、つきぐさ(月草、鴨頭草)、通称名及び別名つゆくさ(ももよぐさ、もまくさ、さめばな、あをある、あをばなうつし、うつしばな、おもひぐさ、からがし、かうやのめん、かうやたらう、かきばなまつか、かまつこ、かめがら、かもかしらぐさ、ぎすぐさ、ちんちらばな、つみくさ、とんぼくさ、はながら、はなだぐさ、ははしぐさ、べちべちばな、ほたるぐさ)(万葉植物)

右の用例によつても判然とするやうに、月草の色の移ひ易いことから、露草の別名を縹とも云ふのである。篠目抄にも(大言海取載)「夏秋をかくてぞ露のはなだぐさ色にあまれる言の葉なれば」と見える。

清水浜臣本の書写による長野県立図書館蔵若下貞融自筆本に、融云、こゝにはなだの女郎とあるかたよろしくして、目錄に縹女御とあるかたかへりてわろくおぼゆ。是はすぎものゝやんごとなき所にて、物いひけさうせし縹女郎を、さとにまかりたるとき、てたづねて、あまたの女どものおのが主の君を木草にたとへいふを見れば、かつ／＼おのがしりたる人どもなれば、ふと歌などよみ出たれば、女ども、それとさとりてものするほどに、暁になれば出ぬ也。心あてにせし縹女郎はそこにはあらぬなり。(はなだの女御篇四 九ウ 書込み)

とへ伝るが、この例文の末尾に「心あてにせし縹女郎はそこにはあらぬなり。」と述べる貞融(一八〇一—一八六七)の應説は、本物語の全文より飛躍すぎた謬見と考へる。

「はなだの女御」の第一段中に、

五の君、「四条の宮の女御、つゆくさのつゆにうつらふとかや、あけくれの給はせしこそまことにみえしか。」

とあり、五の君が、露草と命名してお仕へする四条の宮の女御について、「四条の宮の女御様は、露草の露にうつらふなど、いつもいつていらつしやいましたが、本当にそのやうになつてしまひました。」と語つてゐる。第二段でも五の君は、

たのむ人(四条の女御)つゆくさごことにみゆめればきえかへりつゝなげかるゝかな

と述懐する。次に主人公である例の好色男は、この物語の末尾近くで、その女御のみやとて、のどかには、かのきみこそかたちをかしかなれ

堤中納言物語「はなだの女御」題名考

とある。作者は、五の君に対する男の内在の意識を初めて此処に表現した。男の意中は、四条の宮、即ち露草の女御にお仕へする五の君を最も懸想し、しかも五の君は、露草の如く寵愛の衰へた四条の女御に仕へてゐる。此処に露草の異名にかへて「はなだの女御」といふ題名の命名が存してゐるのではなからうか。本物語に於ける作者の構想は、第一段では、自分達(女房)のお仕へしてゐる女御を次々と話題に登場させて、その美貌、性格、環境等に相応する草花をもつて、その主人に譬へ、それが第二段になると、これらの口から代表的な主人を更に引き出し、歌に詠み上げて品評する。その場面を例の男は植込みの蔭で聞くといふ趣向である。第三段に至つて、この男は特に関心のある女房達を批評していつて、最後に上記の五の君に及んで物語を終止する仕組みである。あたかも堤中納言物語の一篇である「あふ坂こえぬ権中納言」の物語構想では、根合、歌合、中納言の懸想といふ三文段から構成され、第一段第二段に於いては、物語の主人公である中納言をば、上記兩段の行事の中で、多少具体化した暗示的な描写をなし、しかも根合、歌合の中に、中納言が姫君に懸想する第三段へ、第二段は、第三段の序曲であつて、当該題名をこの第三段より取上げ、「あふ坂こえぬ権中納言」と婉曲に命名したのと、以上の通り「はなだの女御」の題名を施す趣向の意図は、共に似通つてゐる。また源氏物語末摘花の巻名も、同巻の後段に見える

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖にふれけむから出てをり、しかも、この末摘花は紅花の異名となつてゐるのである。